



保健師だより

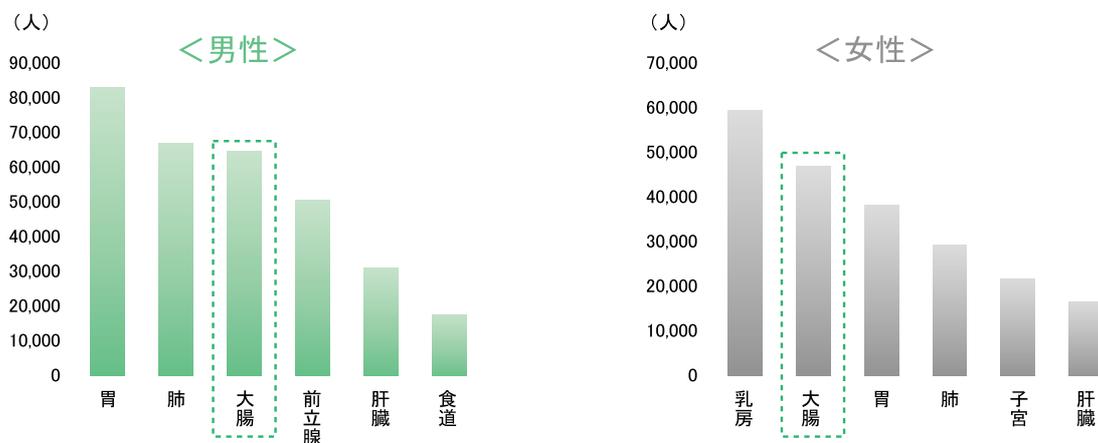


5月から各地区で健康診査・各種がん検診がはじまりました。5月号では村の前立腺がん検診で「がん」が発見される方が年々多くなってきていることから、前立腺がんについて掲載しました。今回は、2番目に多く発見される「大腸がん」についてです。

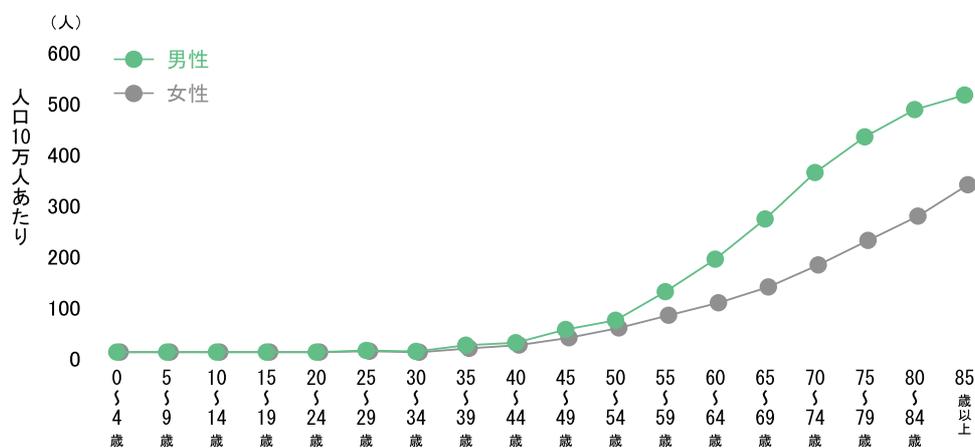
*大腸がん患者は40歳から増加

日本で1年間に新たに大腸がんと診断された人数は、2008年では男性は約7万人、女性は約5万人であり、増加傾向にあります。また、臓器別で比較すると、大腸がんは男性で3番目、女性では2番目に多いがんです。(図1) その割合を年齢別にみると、大腸がんにかかる人は40歳から年を重ねるにつれて増えていることがわかります。(図2)

【図1】臓器別がん罹患数(2008年)



【図2】大腸がんの年齢別罹患率(2008年)



出典：独立行政法人国立がん研究センターがん対策情報センター

*大腸がんの症状は…

大腸がんの症状は、大腸のどこに、どの程度のがんができるかによって異なりますが、血便、下血、下痢と便秘の繰り返し、便が細い、便が残る感じ、おなかが張る、腹痛、貧血、原因不明の体重減少などが多い症状です。中でも血便の頻度が高いのですが、痔などの良性疾患でも同じような症状がありますので、早めに消化器科、肛門科などを受診することが早期発見につながります。時には、嘔吐などのがんによる腸閉塞の症状で発見されたり、肺や肝臓の腫瘍として大腸がんの転移が先に発見されることもあります。

“がん”と聞くと、あとどれくらい生きられるかを示す「余命」が気になるという方は少なくありません。しかし、大腸がんは早期に発見すれば、高い確率で治すことができます。しかし、大腸がんは早期の段階では、症状を自覚することがありません。早期に発見するために、40歳以上の方は定期的に検診を受けることをお勧めします。